

門前3号墳・4号墳の発掘調査

大山町教育委員会では、農地造成にともなって、平成27年10月から28年3月にかけて門前3号墳と4号墳の発掘調査を実施しました。

門前古墳群は、門前集落から下大山集落にかけての丘陵上に分布し、16基の所在が知られています。門前3号墳(全長18m)と4号墳(同16m)は、この古墳群の最南端にあたる標高70〜78m付近に位置しています。



▲3号墳(手前)、4号墳(奥)

両古墳とも、古墳時代中期末〜後期前葉頃(今から約1500年くらい前)に造られた円墳です。その埋葬施設は、当時の旧地表面に大きな穴を掘り込んで木棺や石棺を設けてあります。その中に被葬者の遺体を安置した後に周囲に溝(周溝)を巡らせ、掘って

出た土を墳丘として内側に盛りあげて古墳を築いてあります。埋葬施設は4号墳は木棺でしたが、3号墳は自然石を組

み合わせた箱式石棺で、棺の内面にベンガラ(酸化鉄が主成分の赤色顔料)が塗られていました。残念なことに、明治時代頃に破壊を受けており、石材は原位置を留めていない状況でした。石棺も木棺もこの頃に多く用いられた埋葬形態です。

調査では古墳時代の須恵器や土師器などのほかに、縄文土器や弥生時代中期頃の土器も出土しています。調査区内ではその頃の住居跡などが確認できなかったため、詳しい



▲周溝の堆積状況



▲周溝検出

ことは分かりませんでした。墓域としては古墳2基の築造で終焉を迎え、後世に畑として利用されるようになるまでの間、長く人々の活動の場として利用されることはなかったようです。

まちのたから(14) 文化財室通信

末社 下山神社の巻

今回は、大神山神社奥宮(旧大智明権現社)の東側に位置する「末社下山神社」を紹介します。

下山神社は元徳2年(1330)に備中国(岡山県西部)の鈴木某と争って死亡した同国の渡部源五照政の亡骸を下山に埋葬して塚を築き、後にその御霊を大山寺の利壽権現社(阿弥陀堂の約100m東に跡地あり)の傍らに下山善神として祀ったのが始まりで、文和元年(1352)の神託で大智明権現社の東側(現在地)に移されました。明暦2年(1656)から下山明神と呼ばれるようになりました。

下山明神は大智明権現の使の白狐とも言われ、山伏らによって託宣神としての霊験が広まり、戦国時代から江戸時代初期には吉川元春や亀井政矩などの武将から厚く信仰され、江戸時代には民間にも広

まりました。古絵図には下山キャンブ北側付近の位置に「下山旧跡」「明神塚」と見え、塚が旧跡として伝えられるほど大山信仰において大きな位置を占めていたことがうかがえます。

現社殿は、寛政8年(1796)の大火災による焼失後、津和野藩主の亀井氏により文化2年(1805)に再建されたものです。八棟権現造の複雑な屋根構造をもち、格天井には華麗な花鳥・動物などが描かれています。

昭和63年12月に大神山神社奥宮とともに国重要文化財に指定されました。

(人権・社会教育課文化財室)

